

SD法によるディ・ケア通院者の社会復帰 を巡る諸意識についての分析

吉本博昭, 山野俊一, 梶川正和,
水野豊, 水上曜子, 浅井貴美子,
目木由美子, 塩田順子, 島田真由美,
本田徹 (富山市民病院神経科精神科)
草野亮 (福井県立精神病院)

I. はじめに

精神科ディ・ケア (以後、ディ・ケアと略す) は、精神科医療機関のリハビリテーション活動の重要な一翼を担っている。昨今、ディ・ケア施設基準の緩和と保険点数のアップに伴い全国の施設数も増加してはいるが、未だにディ・ケアの治療論や機能論についての論議が続いているのが現状である。

富山市民病院ディ・ケアは、昭和59年に保険給付施設として認可され、蜂矢英彦氏の言葉を借りれば「治療する」ディ・ケアとして、特に社会復帰を目標として活動してきた。しかし、現実には社会復帰できない者や復帰できてもすぐに再入院する者も少なくない。日々の活動はマンパワー不足もあり、プログラム施行に追われがちで、通所者 (大部分が精神分裂病者) の考え方や意識を知る機会が意外に少ない。特に、社会復帰を目指した通所者との話合いの場で、スタッフとの考え方や意識の違いに愕然とさせられることがある。

そこで、通所者が社会復帰しようとした時に必要と思われる事柄に関連のあるコンセプト (概念)、例えば「仕事」、「病気」、「家族」などがいかなる情緒的意味 (イメージ) を持っているか知る必要性を感じた。それを把握して、通所者の社会復帰に向けての働きかけを強化できれば、ディ・ケア活動を益々発展させることができるものと考えた。

さて、今回使用したSD法 (Semantic Differential法) はオスグッドによって提唱されたもので、彼の意味論を実証する役割を担っていたが、その後、意味論をめぐる論争の末、SD法の限界を認め彼は他の方法に移っていった経過がある。そこで、岩下 (1983) の指摘するようにオスグッドの意味論から離れ、イメージ測定 の道具として利用することにした。SD法によって、通所者

が社会復帰する際に必要と思われるコンセプトのイメージを、一つは評定尺度についての分析によって、他方は因子分析による因子抽出と因子スコアの3次元的作用によってその意味空間を明らかにしようとするものである。

さらに、従来計算の処理が大変であったSD法が、パーソナルコンピューターのハード、ソフトの発達により、利用しやすくなったことを例示したい。

II. 方法

1. 対象

調査対象はディ・ケア通所者群20名で男10名、女10名、平均年齢34.8歳 (SDは13.0)。全例精神分裂病者であった。ディ・ケア利用者のほとんどが精神分裂病者で占められることと、各疾患間の差による社会復帰をめぐるコンセプトのイメージの差異を除く為である。通所者群の15名は月曜から金曜日の毎日を、午前9時から午後3時までディ・ケアのプログラム (グループ活動、クラブ活動、作業、レクリエーション等) を行っていたが、5名の者は週に1回から2回の通所しか行っていなかった。この5名の内、2名は共同作業所に通所し、2名は現在職を有し勤めていた。残りの1名と毎日通所していた15名は現在休職中ないし、無職、主婦で仕事をしていなかった。対照群は、ディ・ケア・スタッフ6名で男3名、女3名、平均年齢32.0歳 (SDは6.8)。職種の内訳は、医師1名、看護師1名、看護婦2名、P.S.W. 1名、O.T. 1名であった。

この両群は、性別の比率は等しいが、年齢については平均年齢の差異が極く僅かであったものの、標準偏差値が通所者群で大きく、対照群の範囲が22歳から41歳に対し18歳から61歳と年齢差が大きかった。そのため、年齢によるイメージの差異が入り込む余地を完全に除外はできなかった。

2. 手続き

概念（コンセプト）の選択：コンセプトとして、13個（ディ・ケア、仕事、医師、お金、社会、病気、薬、家族、私、友達、父、母、性）を選んだ。病気、薬、医師は分裂病者が再発を防ぎながら、社会の一員として生活する為に必要となる医療継続に関係するコンセプトとして選んだ。家族、父、母を選択したのは、Brown (1972)らの研究によって、分裂病者の予後は家族関係のあり方に大きな影響を受けると言われている為に選んだ。さらに、大石 (1974) が12個のコンセプトについて研究をしているので、今後も比較できるように、私、友人、性を追加した。今回の研究では通所者が社会復帰に際して係わる必要があると考えた、10個のコンセプト（ディ・ケア、仕事、医師、お金、社会、病気、薬、家族、私、友達）に限定して分析を行った。

尺度の選択：尺度は大石 (1974) が使用した20対の反対語を用いた。その形容詞対は、「きびしいーやさしい」、「明るいー暗い」、「悲しいーうれしい」、「弱いー強い」、「美しいーみにくい」、「白いー黒い」、「かたいーやわらかい」、「深いー浅い」、「不潔なー清潔な」、「楽しいー苦しい」、「つめたいーあたたかい」、「するどいーにぶい」、「貧しいー豊かな」、「大きいー小さい」、「にぎやかなー静かな」、「永遠なー一時的な」、「悪いーよい」、「人間的なー動物的な」、「重いー軽い」、「愉快なー不愉快な」であった。

SDスケールの作成：大石が使用した尺度を利用し、刺激となるコンセプトに対して、20の形容詞対につき、それぞれ7段階の評定（非常に→かなり……どちらでもよい……かなり→非常に）を行うようにした。

一方、13個のコンセプトは、各被験者に対しランダムに提示し、先行コンセプトの影響をランダム化するようにした。

3. 分析方法

以下に提示する分析結果は、渡(1983,1984)の多変量解析プログラムを一部改変して、NEC PC-9801を使用しておこなった。方法は、データの入力に引続き、尺度ごとの平均と標準偏差を計算し、それに基づきSDプロフィールの作成を行った。因子分析は、相関行列を計算後、共通性の推定をSMC（重相関係数の2乗）を用い、因子負荷量の計算は主因子解を利用し、因子の回転はバリマックス回転を用い因子を抽出した。さらに、因子得点に基づいてコンセプトの意味空間の位置づけを3次元的作用図を作成し分析を行った。なお、渡の多変量解析プログラムでは、共通性の推定、因子負荷量の計算や

因子回転の方法を幾種類か選択可能である。なお、7段階の評定を計算する際にSDプロフィール上の左側の極を1とし、右方向に2, 3, 4, 5, 6, 7とし、データの数値化を行った。

III. 結果と考察

1. 両群間のSDプロフィール上の差異

10個のコンセプトに対し、両群のSD尺度上の評定の平均値と標準偏差値（表1）を計算した。検定はWilcoxonの検定によって有意差検定を行った。

一方、表1のような一覧表では差異を直感的につかみにくいので視覚的把握に便利のように、図1のようなSDプロフィールを作成した（図1～10）。考察にあたっては、両群間で5%水準以下で有意差を示す尺度は少なかったため、10%水準をも検定し、SDプロフィールの差異傾向を検討した。

通所者群が、対照群と比較してプロフィール上顕著な差異を示したコンセプトは「家族」（図1）であった。対照群の選んだイメージは、やさしい、明るい、あたたかい、楽しい、永遠な、人間的な、うれしい、強い、愉快ななどの尺度で平均値が高くポジティブな像であった。それに対し、通所群は、やさしい、明るい、楽しくなどの尺度で有意に低く、するどい、かたいなどでかえって高得点を示した。以上より、通所者群の「家族」イメージは対照群ほどポジティブな像ではなかった。

「仕事」（図2）については、清潔な、にぎやかな、美しい、愉快的な、楽しいなどの尺度が対照群より有意に高く、反対に、強いでは低く、一方、重い、きびしいなどで同得点傾向を示した。総じて通所者群の方が楽観的なイメージであった。この結果は、通所者20名の内1割が就職しているにすぎず、その為仕事に対する通所者の夢や期待が反映したのではないかと考えた。

「社会」（図3）は「仕事」と同じプロフィールを想定したが、現実の社会に生きている証しか、するどい、悲しいなどで対照群より有意に高く、現実の厳しさを反映している為と解釈したが、一方、通所者群では美しい、清潔なで高いが対照群はみにくい、不潔なで高く、現実社会に対する甘さも考えられた。

「お金」（図4）に対するイメージは、強い、きびしい、うれしい、不潔な、つめたいなどで通所者群の得点は有意に低く、一方、通所者群でするどいが高いのはディ・ケア料や交通費の支払いを毎日する為とも考えられたが、総じて生活感からにじみ出た厳しさにやや欠けるプロフィール像と考えた。

「病気」（図5）に対しては、両群間で有意差を示す

表1. ディ・ケア通所群(S)と対照群(C)の10コンセプトのSD尺度評点の平均と標準偏差(括弧内が標準偏差)

コンセプト		ディ・ケア	仕事	医師	お金	社会	病気	薬	家族	私	友達
きびしい—やさしい	S	4.7(1.7)	2.3(1.3)	4.4(2.0)	3.1(1.6)*	1.8(1.1)	2.7(1.3)	3.1(1.4)	3.7(1.8)**	4.4(1.7)	4.9(1.5)
	C	5.0(1.3)	2.0(0.8)	3.2(1.1)	2.0(0.8)	2.0(0.8)	2.2(0.7)	3.2(0.9)	5.8(0.4)	3.7(1.2)	4.3(1.2)
明るい—暗い	S	2.6(1.6)	3.9(1.8)	2.9(1.5)	4.7(1.5)	3.9(1.8)	4.9(1.6)	4.2(1.7)	3.9(1.9)**	3.0(1.5)	3.0(1.3)
	C	3.2(1.1)	3.3(1.2)	3.5(0.5)	4.0(0.8)	3.8(0.9)	5.7(0.7)	4.7(1.2)	2.2(0.7)	3.5(1.0)	2.5(0.5)
悲しい—うれしい	S	4.8(1.3)	4.4(1.6)	4.7(1.7)	4.2(1.5)*	3.2(1.6)*	2.5(1.6)	3.4(1.6)	4.8(1.8)	4.2(1.8)	5.3(1.3)
	C	4.3(0.5)	4.5(0.5)	4.0(0.6)	5.2(0.7)	4.0(0.8)	2.2(0.9)	3.0(0.8)	5.5(1.0)	4.0(0.6)	5.5(0.5)
弱い—強い	S	3.8(1.4)	4.1(1.6)*	5.4(1.4)	3.6(1.5)**	4.3(1.9)	2.7(1.4)	4.3(1.6)	4.7(1.7)	3.8(1.7)	4.8(1.5)
	C	3.7(1.1)	5.0(0.8)	5.3(1.4)	4.8(0.7)	4.7(0.7)	3.7(1.6)	4.0(1.4)	5.5(1.0)	4.2(0.9)	4.8(0.7)
美しい—みにくい	S	3.4(1.4)	2.9(1.2)*	2.9(1.4)*	4.7(1.4)	3.5(1.5)**	5.3(1.1)**	3.7(1.5)	2.8(1.4)	4.2(1.5)	2.9(1.4)
	C	3.5(0.5)	3.8(0.7)	3.7(0.5)	4.7(0.7)	4.7(1.1)	4.2(0.7)	3.8(0.4)	3.0(0.8)	4.2(0.4)	3.2(0.4)
白い—黒い	S	2.9(1.4)	3.4(1.8)*	3.2(1.5)	4.2(1.7)	4.1(1.7)	4.3(1.8)	2.8(1.4)	3.0(1.4)	2.9(1.5)***	2.7(1.1)**
	C	3.7(0.5)	4.3(0.5)	3.7(0.7)	4.5(0.8)	4.7(0.7)	3.8(1.8)	2.8(0.9)	3.5(0.8)	4.5(0.5)	3.7(0.5)
かたい—やわらかい	S	4.7(1.5)	3.7(1.6)	3.7(1.8)	3.2(1.4)	3.4(1.6)	3.9(1.6)	3.9(1.8)	3.3(1.5)**	3.8(1.6)	3.9(1.6)*
	C	4.5(1.0)	3.3(0.7)	3.5(1.1)	3.3(0.5)	3.0(0.6)	3.5(0.8)	4.5(1.4)	4.7(0.9)	3.7(1.1)	4.8(0.7)
深い—浅い	S	3.9(1.4)	3.1(1.7)	3.0(1.4)	3.6(1.7)	3.2(1.7)	2.9(1.6)	2.8(1.5)	3.4(1.7)	4.0(1.7)	3.3(1.6)
	C	3.8(1.8)	3.2(0.7)	3.0(0.8)	3.5(0.8)	3.5(0.5)	3.2(0.7)	3.0(1.2)	3.3(0.7)	4.2(0.7)	3.5(0.8)
不潔な—清潔な	S	5.6(1.1)**	5.3(1.4)**	5.6(1.4)	4.2(1.7)*	4.4(1.5)*	4.1(1.6)	4.8(1.6)	5.3(1.5)	4.9(1.6)	5.2(1.2)*
	C	4.3(0.9)	4.3(0.5)	5.0(0.6)	3.5(0.5)	3.7(0.5)	4.3(0.9)	5.2(1.1)	5.0(0.6)	4.3(0.5)	4.3(0.5)
楽しい—苦しい	S	3.1(1.3)	3.1(1.7)	3.6(1.7)	3.7(1.7)	3.8(1.8)	5.6(1.2)	4.3(1.5)	4.0(2.0)**	3.4(1.8)	2.5(1.2)
	C	3.7(1.1)	3.8(0.9)	4.2(0.4)	4.0(0.6)	4.3(1.1)	5.8(0.7)	4.7(1.1)	2.3(0.9)	3.5(0.8)	2.7(0.7)
つめたい—あたたかい	S	5.3(1.3)	4.4(1.7)	5.3(1.4)*	4.0(1.5)*	3.5(1.6)	3.2(1.7)	4.2(1.5)	4.8(1.8)	4.4(1.6)	5.3(1.1)
	C	4.8(1.1)	4.0(0.8)	4.2(1.3)	3.5(0.5)	3.5(0.5)	3.3(0.9)	3.5(1.3)	5.8(1.1)	4.5(1.0)	5.3(0.7)
するどい—にぶい	S	3.6(1.5)	2.8(1.4)	2.5(1.4)	3.4(1.4)*	2.6(1.3)*	3.7(1.8)	3.1(1.4)	2.7(1.0)***	3.3(1.6)	2.8(1.3)
	C	4.0(0.6)	3.0(0.6)	2.8(0.7)	4.2(0.4)	3.5(0.8)	3.5(0.8)	3.3(0.7)	3.8(0.4)	3.8(1.3)	3.3(0.7)
貧しい—豊かな	S	4.3(1.3)	4.3(1.8)	5.4(1.4)	3.6(1.5)	4.5(1.6)	3.3(1.5)	4.3(1.5)	4.1(1.8)	3.5(1.8)	5.3(1.1)*
	C	4.2(0.7)	4.5(0.5)	4.8(1.1)	3.5(0.5)	3.8(0.7)	3.5(0.8)	3.8(0.9)	5.0(1.3)	3.8(0.7)	4.5(0.8)
大きい—小さい	S	3.5(1.5)	2.8(1.3)	2.9(1.3)	3.5(1.7)	3.0(1.6)	3.5(1.7)	2.8(1.1)*	3.2(1.6)	3.5(1.7)	3.0(1.3)
	C	4.0(0.8)	2.8(0.7)	2.8(0.7)	3.3(0.9)	2.7(0.7)	4.2(1.2)	3.8(1.2)	3.2(1.3)	3.7(0.7)	3.3(0.7)
にぎやかな—静かな	S	2.7(1.4)	3.1(1.6)**	4.8(1.8)	4.2(1.4)	2.8(1.2)	5.2(1.4)	4.5(1.5)	3.4(1.6)	4.3(1.7)	3.0(1.5)
	C	2.7(0.5)	4.2(0.7)	4.8(1.1)	4.2(0.7)	3.3(0.7)	4.7(0.7)	4.5(1.1)	2.8(0.4)	4.2(0.9)	2.8(0.7)
永遠な—一時的な	S	4.6(1.2)	3.5(1.7)	3.0(1.6)	4.4(1.4)	3.4(1.7)	4.0(1.6)	3.6(1.8)	2.8(1.3)	4.1(1.8)	3.6(1.7)
	C	3.8(1.3)	3.3(1.2)	3.3(0.7)	4.7(1.2)	3.5(1.0)	4.5(0.8)	4.5(1.3)	2.3(0.9)	3.8(0.7)	3.0(0.8)
悪い—よい	S	5.2(1.2)	5.4(1.2)	5.7(1.5)*	4.3(1.4)	4.2(1.4)*	3.1(1.3)	4.9(1.5)	5.1(1.7)	4.7(1.6)	4.9(1.4)
	C	4.7(0.9)	4.7(1.1)	4.8(0.9)	4.3(0.9)	3.3(0.7)	2.8(1.1)	4.2(1.6)	5.3(0.9)	4.5(0.5)	5.2(0.7)
人間的な—動物的な	S	3.2(1.9)	2.6(1.4)	2.4(1.3)	4.0(1.7)	3.0(1.5)	3.7(1.6)	2.8(1.4)	2.4(1.2)	3.3(1.4)	2.7(1.3)
	C	2.2(0.9)	2.3(0.9)	2.7(0.7)	3.7(0.5)	3.7(1.1)	3.0(0.8)	3.5(0.8)	2.3(1.1)	2.7(0.9)	2.2(0.7)
重い—軽い	S	3.9(1.6)	3.1(1.5)	3.3(1.5)	3.8(1.6)	2.8(1.2)	2.9(1.5)	3.8(1.8)	2.6(1.3)	4.0(1.7)	4.0(1.8)
	C	3.8(1.5)	3.0(1.3)	2.3(0.7)	3.0(1.0)	3.5(0.5)	3.2(0.7)	3.0(0.6)	3.0(1.3)	4.0(0.8)	3.3(0.9)
愉快な—不愉快な	S	3.0(1.2)	2.9(1.3)*	3.0(1.4)**	4.1(1.4)	3.6(1.4)	5.0(1.3)	4.2(1.6)	3.3(1.7)	3.4(1.5)	2.7(1.1)
	C	3.3(0.7)	3.7(0.5)	4.0(0.0)	4.0(0.0)	4.0(0.0)	4.7(0.7)	4.5(1.1)	2.5(1.0)	3.7(0.5)	2.8(0.7)

*** p<0.01 ** p<0.05 * p<0.10

尺度は美しい—みにくいのみであり、似たようなプロフィール像であった。ただ、通所者群の方がみにくいで高く、対照群ではみにくくも美しくも、どちらのイメージも持っていなかった。この結果は、医療に係わる対照群にとって、病気を、特に精神病に対してより医学的立場に立って考えている為に、みにくいというイメージを持たなかったものと考えた。

「ディ・ケア」(図6)のイメージは、両群間で有意差を認めた尺度が不潔な—清潔なでありイメージ差は少なかった。ただ、通所者群では、清潔なで得点差が大きく、明るい、あたたかい、白い、楽しい、うれしいなどで有意差はないものの平均点で高い傾向を示し、ディ・ケアをどちらかと言えばポジティブな像としてとらえていると考えた。この点は、「家族」のプロフィール像が、

ニュートラルないしネガティブであったのと対称的であり、当ディ・ケアは、通所者にとって「家族」のイメージに欠けている一部分を補っているのではと推測した。この点は、通所者の多くは当科退院者で占められており、その中にディ・ケアという中間施設があって始めて退院できたものや、家庭の中に安住の場所を見つけることができないものが含まれている為とも考えられた。

「薬」(図7)のイメージは、通所者群の方が、大きいで有意に高い傾向を示した以外、ほぼ同一イメージであった。この点から通所者群にとっては、薬に対する期待とともに、長期間の服薬に対する重荷が窺われた。

「友達」(図8)のイメージは、通所者群の方が、白い、豊かな、清潔ななどで有意に高く、反対に対照群でやわらかいで高い傾向を示した。このプロフィールは現実

【家族】

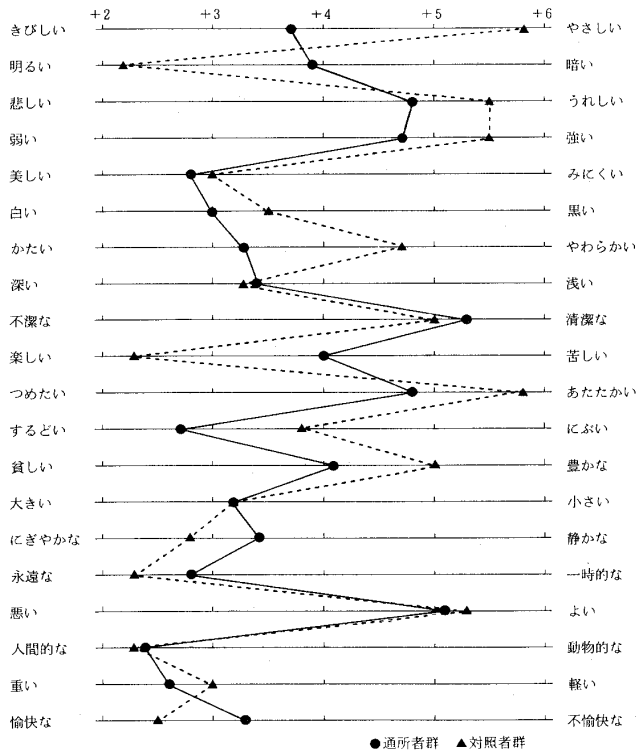


図1. 「家族」のSDプロフィール

【仕事】

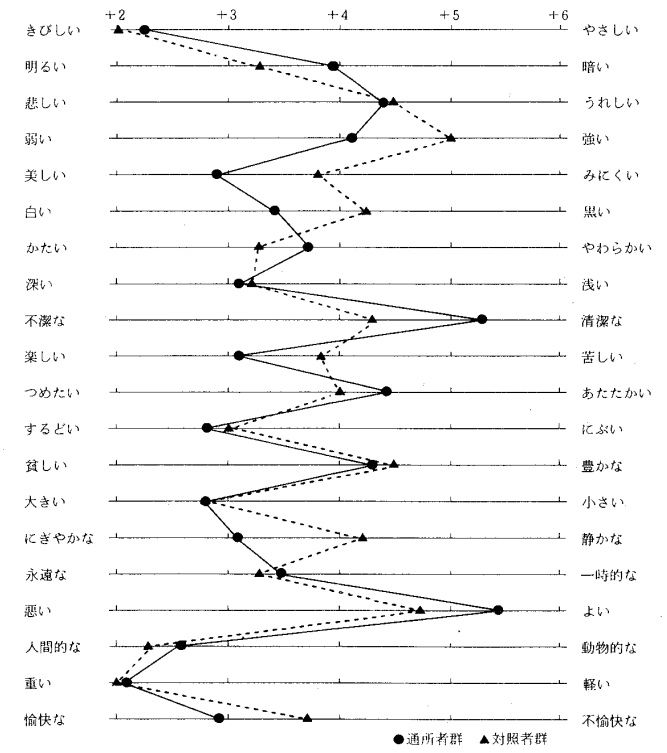


図2. 「仕事」のSDプロフィール

【社会】

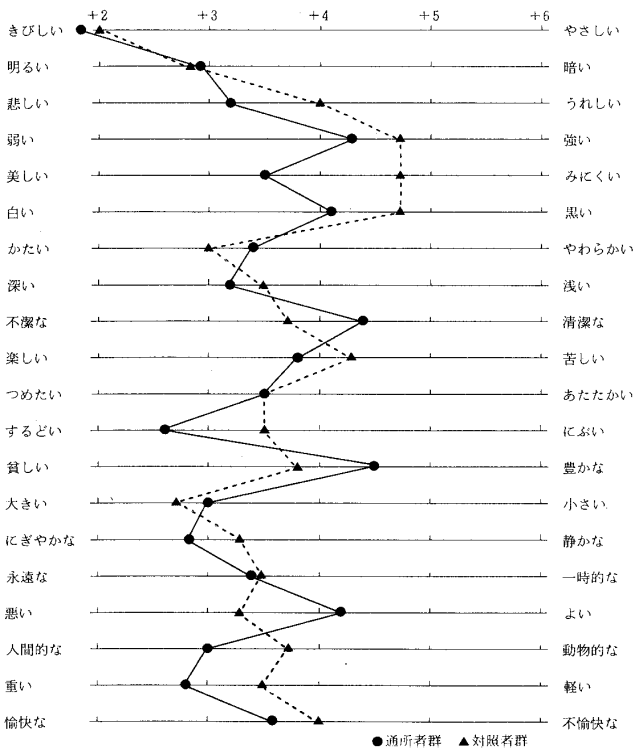


図3. 「社会」のSDプロフィール

【お金】

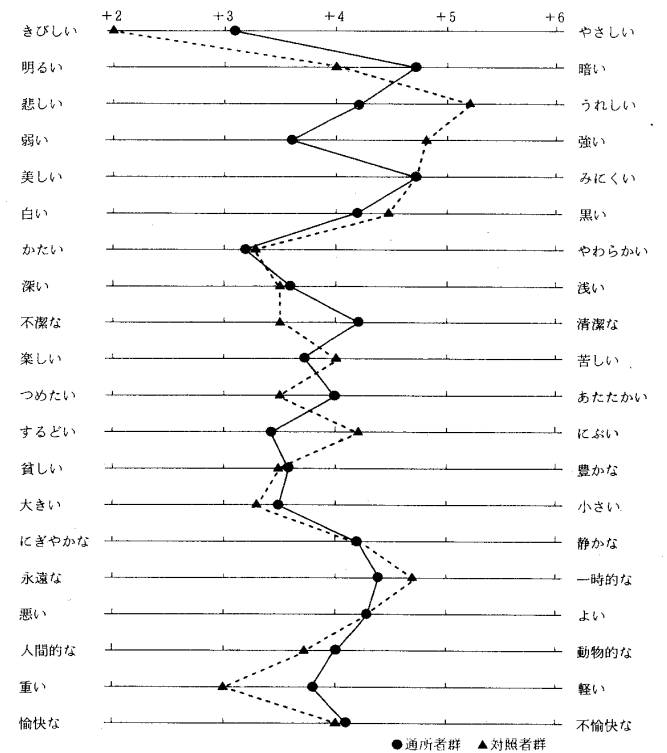


図4. 「お金」のSDプロフィール

【病 気】

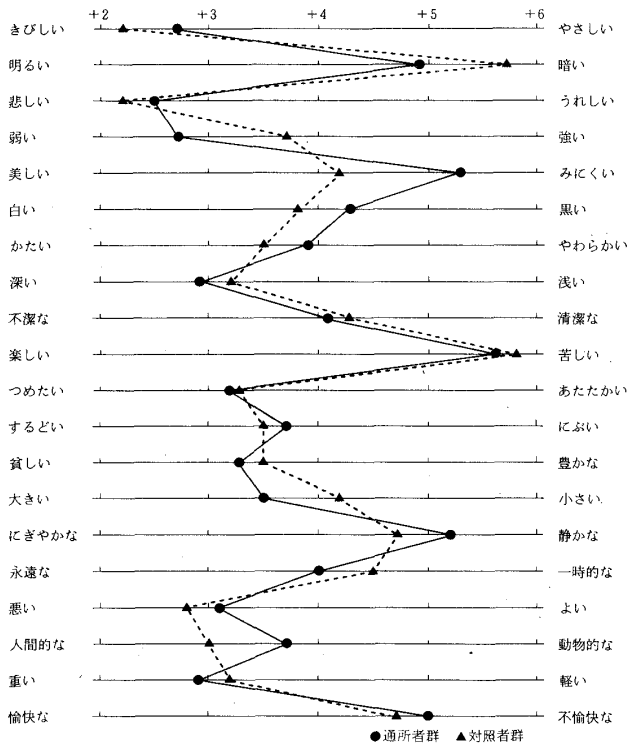


図 5. 「病気」のSDプロフィール

【ディ・ケア】

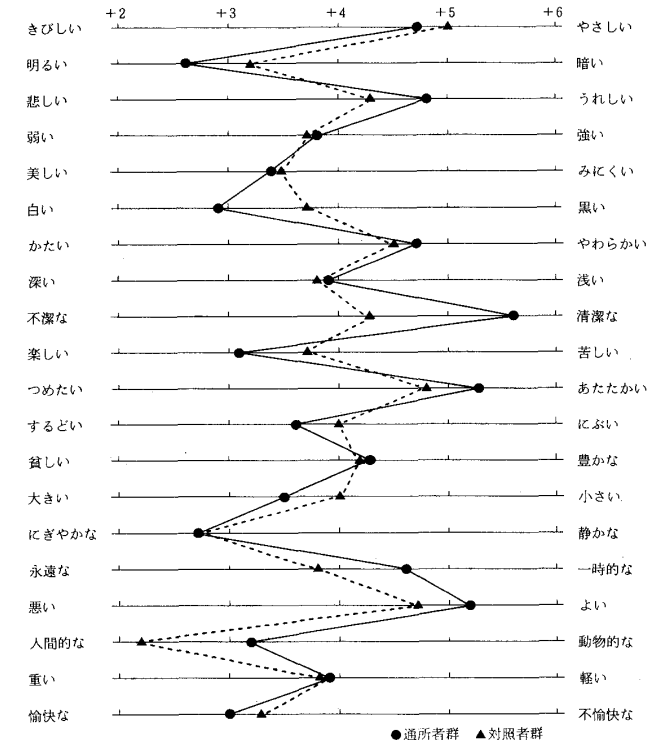


図 6. 「ディ・ケア」のSDプロフィール

【薬】

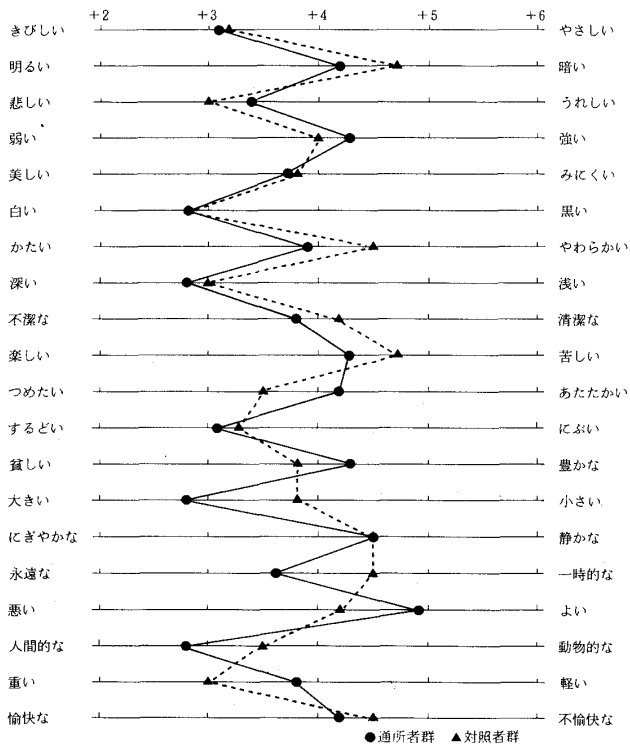


図 7. 「薬」のSDプロフィール

【友 達】

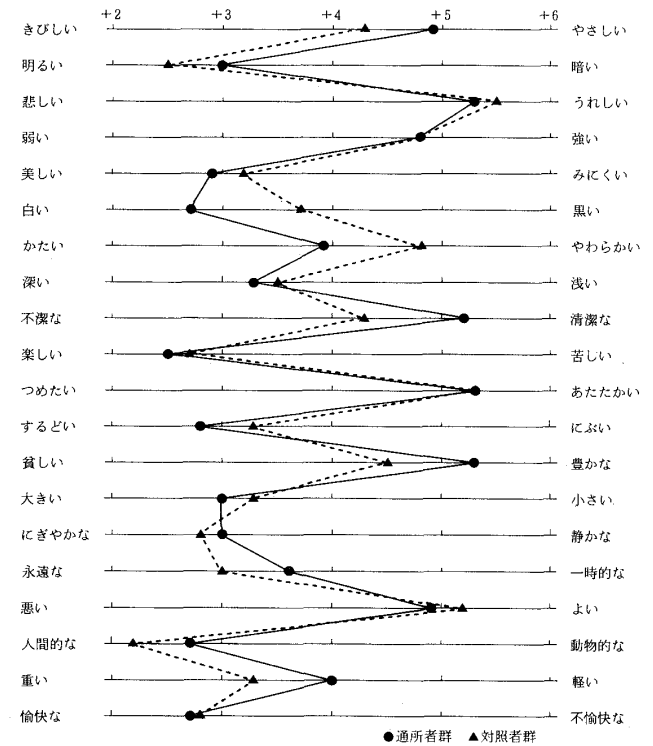


図 8. 「友達」のSDプロフィール

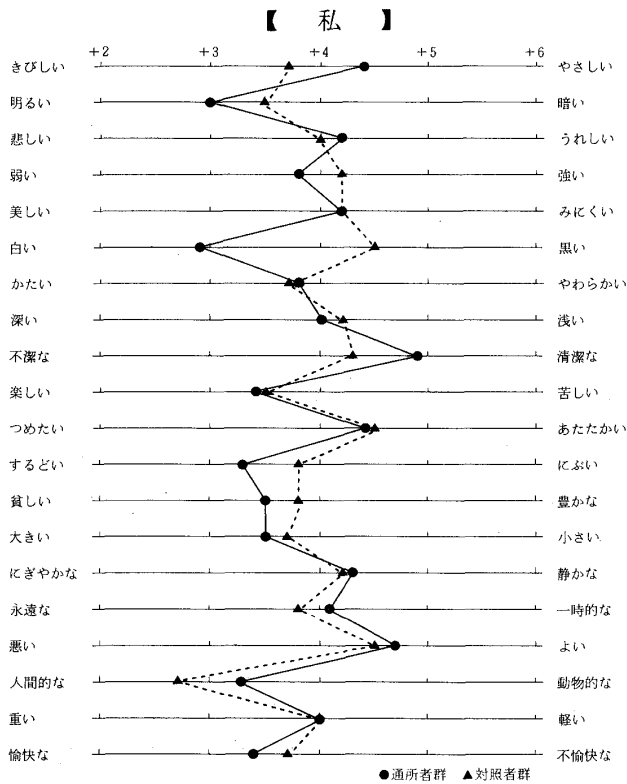


図9. 「私」のSDプロフィール

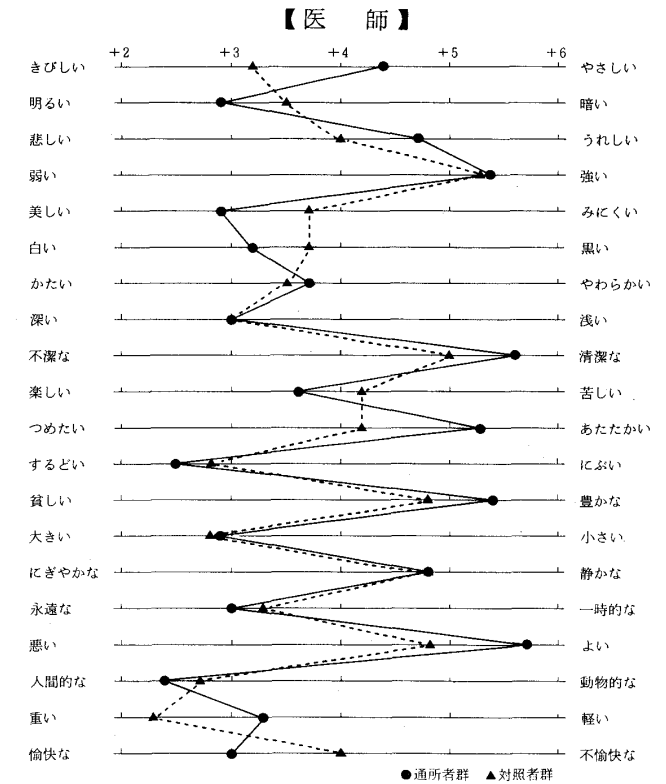


図10. 「医師」のSDプロフィール

の友達のイメージというより対人関係の困難性にもかかわらず友人への希求を象徴しているものと考えた。

「私」(図9)に関するイメージは両群ともに平均得点は低く、標準偏差値も大きくないことからイメージのバラツキが小さいというより貧困なイメージであると考えた。そのなかで、尺度白い-黒いのみで有意差を認めた。また、通所者群では、明るい、白いなどで平均得点が高く、対照群では人間的なで高い傾向を示した。この貧困なイメージと両群間で差異のないプロフィール像は、両群間で自我構造の違いも予想されたにもかかわらずこの結果から、このSD法の限界を示しているのかどうか今後の検討が必要であろう。

最後に「医師」(図10)のイメージは両群の比較は困難である。対照群は医師に対して、一般的なイメージとともに上司のイメージが混入していると考えられる。通所者群で有意に高い尺度は、よい、あたたかい、美しい、愉快ななどであり、対照群よりもポジティブな像としてとらえる傾向があった。

以上の結果は、両群間での社会復帰を巡るコンセプトに対するイメージ像の違いを明らかにしたが、特に、通所者を支えるべき「家族」のイメージが必ずしも良くなく、一方、「仕事」、「社会」、「お金」に対する楽観的で

現実認識に欠けるくらいが認められ、社会復帰を目標とした場合の困難性が窺えた。

2. 反応カテゴリーに対する反応の差異

両群間で、コンセプトに対し7段階のどのカテゴリーに反応したかを調べた際に差異を認めた。通所群つまり分裂病群では、7段階尺度の真中のカテゴリーや両端のカテゴリーだけを選択するものが1名、10個のコンセプトに対するカテゴリー選択法がほぼ同様であるが僅かに2段階や5段階などを認めた者が3名、反対に一部に特異な反応カテゴリーの用い方を認めたものが2名で、対照群でまったく認められなかった選択法が30%あったことになる。この点は、大石(1974)も同様の現象を認めており、正常者ではせっぱつまった状態や極度の不安状態にさらされた時にだけ認められることもあるが、分裂病者ではどちらかというとなんか無かという反応の仕方をするようであり、ものごとを判断するのに非常に美しく、非常に強くてというように、誇張がちな傾向があると述べている。この分裂病者の特異な反応形式が如何なる障害によるのか、この研究で指摘することは困難である。コンセプトという刺激に対する情報処理過程の障害であるが、どの過程のいかなる異常であるかは定かで

ない。丹羽 (1984) は、シラブル弁別課題の結果より、分裂病に刺激の受容面の障害 (stimulus set の障害) と判断・反応面の障害 (response set の障害) の両者に障害を認め、両者はある程度独立していると考えている。このような情報処理過程のモデルを考えた場合、反応様式の異常は判断・反応面の障害と考えることも可能である。

3. 両群の因子分析からみた特徴

20個対の尺度評定値から因子分析を行った。因子抽出にあたって、表2、表3で示されるように、累積寄与率が90%を越えた段階で計算をストップし、対照群で4因子、通所者群で5因子が抽出された。

表2. 通所者群の因子負荷量

尺 度	I	II	III	IV	V	共通性	
きびしい	やさしい	-.897	.203	.109	-.098	.250	.931
明るい	暗い	-.812	-.090	-.346	-.217	-.121	.849
悲しい	うれしい	-.836	-.078	-.409	.205	.105	.925
弱い	強い	-.584	-.712	-.157	-.291	-.011	.958
美しい	みにくい	.570	.633	-.482	-.034	-.179	.991
白い	黒い	-.807	.236	-.088	.248	-.107	.788
かたい	やわらか	-.348	.167	-.066	-.898	-.168	.987
深い	浅い	-.405	.742	-.435	.142	.140	.944
不潔な	清潔な	-.855	-.310	-.249	-.217	-.154	.959
楽しい	苦しい	.557	.137	.705	-.099	-.373	.976
つめたい	あたたか	-.936	-.176	-.196	-.047	.118	.961
するどい	にぶい	.196	.777	.286	-.452	.208	.971
貧しい	豊かな	-.471	-.752	-.242	-.031	.175	.878
大きい	小さい	-.023	.978	.106	.014	-.010	.969
にぎやかな	静かな	.138	.075	.947	.105	-.092	.941
永遠な	一時的な	.155	.775	-.089	-.348	.475	.979
悪い	よい	-.751	-.438	-.292	.022	.024	.842
人間的な	動物的な	.500	.767	.139	.027	.339	.973
重い	軽い	-.390	.262	-.005	-.208	.842	.974
愉快的な	不愉快的な	.699	.272	.637	-.057	-.026	.971
寄 与 率		0.372	0.270	0.146	0.076	0.074	

表3. 対照群の因子負荷量

尺 度	I	II	III	IV	共通性	
きびしい	やさしい	-.643	.655	.289	-.095	.935
明るい	暗い	.976	-.043	-.051	.155	.982
悲しい	うれしい	-.946	-.141	-.007	.212	.959
弱い	強い	-.695	-.264	-.643	-.030	.968
美しい	みにくい	.577	-.711	.079	.369	.981
白い	黒い	-.056	-.944	.277	.004	.972
かたい	やわらか	-.428	.853	.181	.045	.946
深い	浅い	-.264	-.229	.877	-.051	.894
不潔な	清潔な	-.047	.773	-.386	-.364	.881
楽しい	苦しい	.969	-.111	-.119	.011	.965
つめたい	あたたか	-.848	.398	.212	-.228	.974
するどい	にぶい	-.160	.007	.666	.653	.896
貧しい	豊かな	-.722	.261	-.400	-.476	.976
大きい	小さい	.483	.607	.555	.160	.935
にぎやかな	静かな	.705	-.138	-.482	-.050	.751
永遠な	一時的な	.815	-.046	.154	.466	.907
悪い	よい	-.843	.307	-.130	-.077	.828
人間的な	動物的な	.536	-.355	-.219	.636	.866
重い	軽い	-.018	-.098	.962	-.034	.936
愉快的な	不愉快的な	.949	-.167	-.201	.120	.983
寄 与 率		0.442	0.209	0.190	0.086	

対照群の因子について見てみると、第I因子で因子負荷量が高い尺度は明るい-暗い、楽しい-苦しい、愉快的な-不愉快的な、冷たい-あたたかいなどで、オスグッドの提唱する第III因子の活動性因子に近いと考え活動性因子と名付けた。第II因子では、白い-黒い、かたい-やわらかい、不潔な-清潔な、きびしい-やさしい、大きい-小さいであり従来の研究で第I因子として明らかにされている評価性因子であろうと考えた。第II因子で高い得点を示す尺度は、重い-軽い、深い-浅い、するどい-にぶい、大きい-小さい、弱い-強いであり先行研究で第II因子として明らかにされている力量性因子と考えた。第IV因子は寄与率が低いことより付加因子とみなした。

通所者群では、各因子にオスグッドの3因子が交錯する傾向が強かったが、以下のように命名した。第I因子で高い尺度は、冷たい-あたたかい、きびしい-やさしい、不潔な-清潔な、悲しい-うれしい、明るい-暗い、白い-黒い、悪い-よいなどで評価性や力量性の因子が混じっており、感性的評価因子と名付けた。第II因子でも高い得点を示す尺度は、大きい-小さい、するどい-にぶい、永遠な-一時的な、人間的な-動物的な、貧しい-豊かな、深い-浅い、弱い-強いなどで力量性因子とした。第III因子は、にぎやかな-静かな、楽しい-苦しい、愉快的な-不愉快的な尺度で高く、気分的活動性因子と称した。第IV、第V因子は寄与率が低いことより付加因子と考えた。

両群に主な3因子が抽出されたが、因子間に命名が似ている結果よりもわかるように、因子の類似性が推定できた。この点について、先行研究の大石 (1974) らは大学生、中学生、精神分裂病の3グループにSD法を実施し、それぞれに3個の主要な因子が抽出され、それぞれのグループの3個の因子は相互に対応する関係が見られたという。我々の結果も3因子寄与率の割合に差を認めるものの、大石の結果と同様に、通所者群と対照者群には因子構造の差異がないものと考えた。一方、次に示す因子得点の3次元図示を行った場合、両群の類似性が高いと思われる因子を軸に、X,Y,Z軸として各コンセプトを布置した場合、いくつかのコンセプトの配置はまったく異なるものの、かなりのコンセプト間で似たような配置空間を示した。この点からも、因子構造はかなり似通ったものであると推論できる。

次に、10個のコンセプトを両群の因子得点 (表4、表5) より、3個の主要因子をX軸、Y軸、Z軸として3次元の意味空間に配置したのが図11と図12である。図の対照群では、因子I、II、IIIに対しX,Z,Y軸を振り

表4. 通所者群の因子得点

コンセプト	I	II	III	IV	V
ディ・ケア	-0.989	1.187	-1.039	-1.876	-0.041
仕事	0.486	-0.811	-1.236	-0.329	-0.476
医師	-1.238	-1.305	1.085	0.515	-0.002
お金	0.745	1.201	0.027	1.689	1.289
社会	1.584	-0.663	-1.345	0.422	-0.365
病気	1.427	0.810	1.634	-0.980	-0.794
薬	0.417	-1.174	1.139	-0.895	0.925
家族	-0.857	0.038	0.104	1.068	-2.178
私	-0.769	1.372	0.241	0.415	0.373
友達	-0.808	-0.655	-0.610	-0.029	1.269

表5. 対照群の因子得点

コンセプト	I	II	III	IV
ディ・ケア	-0.212	0.886	1.681	-0.136
仕事	-0.166	-0.950	-0.703	-1.276
医師	0.001	-0.003	-1.814	-0.947
お金	-0.086	-1.020	-0.243	2.471
社会	0.177	-1.780	0.128	0.081
病気	1.985	0.331	0.305	-0.449
薬	1.184	1.607	-0.769	0.838
家族	-1.774	0.942	-0.394	0.247
私	0.071	-0.518	1.552	-0.545
友達	-1.180	0.505	0.258	-0.283

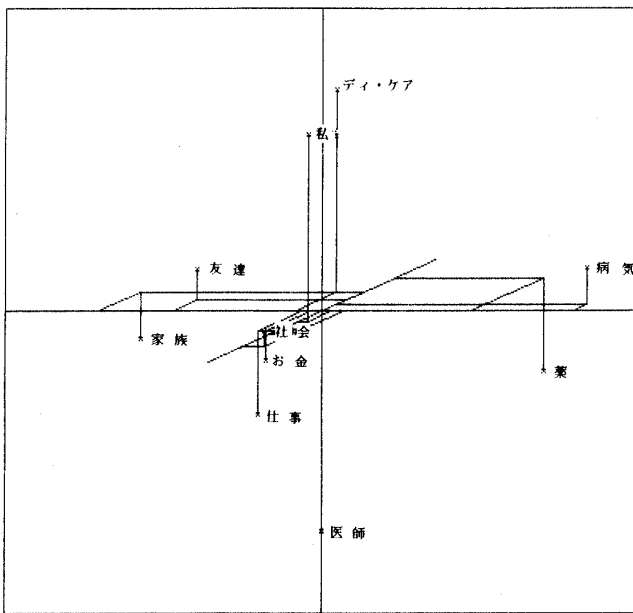


図11. 対照群の因子得点3次元図

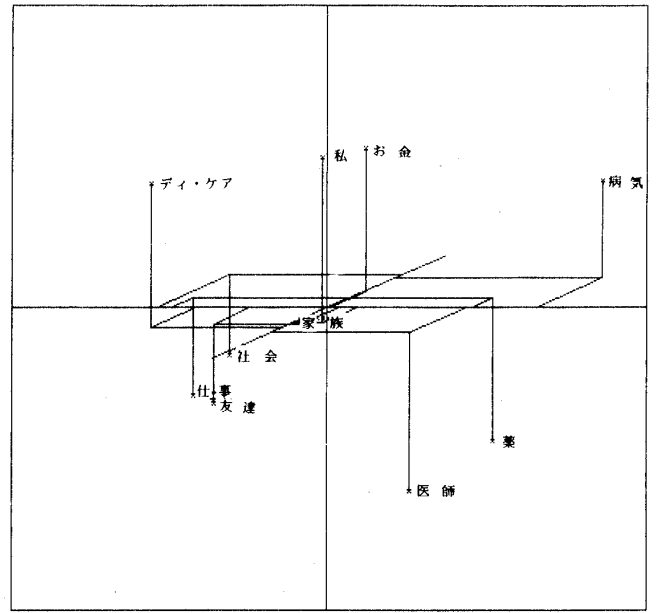


図12. 通所者群の因子得点3次元図

当てである。通所者群は、対照群と比較しやすいように類似因子を各軸に当てた為に、因子Ⅲ、Ⅱ、Ⅰが X、Z、Y軸に対応している。因子得点を見ただけでは意味空間を頭に描きにくいのにに対し、この3次元空間に各コンセプトをプロットすると、より両群の意味空間での差異を指摘しやすい。なお、X軸では左方向が、Y軸では下方向が、Z軸では斜め左下方向がそれぞれプラス・イメージを図で示されている。

その結果を検討してみると、両群で意味空間の配置が著しく異なるコンセプトは、ディ・ケア、家族、お金である。ディ・ケアは、通所者群では気分的活動性や感性的評価についてプラス・イメージが高いのに対し、対照群では評価性がマイナス・イメージを持っており、力量性は両群にとって共通の低いイメージであった。このことは、通所者はディ・ケアに対して高い評価を期待して

いるにかかわらず、医療側が反対のイメージを持っており、このギャップは今後の課題であろう。一方、家族については、通所者群で僅かに感性的評価が高いにすぎないが、対照群では評価性が僅かにマイナス・イメージに対し、活動性が高くついて力量性がプラス・イメージが高いなど顕著な差異を呈した。お金についても、対照群では評価性や力量性でプラス・イメージを持っているのに対し、通所者群では評価性や力量性で反対のマイナス・イメージを持っていることが明らかとなった。この点は、SDプロフィール上でもある程度推測ができた面もあるが、意味空間の差異が明らかとなった。ここでも、Brown (1972) らの指摘を待つまでもなく、通所者には家族関係の問題が潜んでいる可能性がある。それに対し、私、仕事、社会はほぼ同じ空間に配置され同一視されているが、通所者群では仕事について評価性でマイナス・イメー

ち、対照群と反対視の傾向がある。病気、薬は同空間に位置するが、通所者群ではY,Z軸より離れ評価性や力量性でプラス・イメージをより強く持っている傾向があった。これは、病気や薬は通所者群にとって日々の生活上関連の深い問題であり、イメージが鮮明な為であろう。このように、両群間ではコンセプトによって意味空間の違いがあることが視覚的に了解できた。

以上の結果から、通所者群に対する社会復帰に向けてアプローチする際には、我々が抱いているイメージとは異なる認識を通所者が持っているとも考えられ、注意する必要がある。さらに、今後は通所者の意味空間の違いだけでなく、違いを生み出す心理学的、社会学的、生物学的な問題を検討していく必要性も感ずる。

最後に、今回の研究にマイコンを使用して一連の検討が簡単にできたことは、今後イメージ測定の道具としてSD法がますます利用されるのではないかと考えた。

IV. ま と め

SD法を使用し、ディ・ケア通所者の社会復帰に際して係わりの深い10コンセプトに関してその情緒的意味を知る為に調査した。その結果、対照群と通所者群からそれぞれに3因子が抽出された。SDプロフィールの分析により、通所者の家族に対するイメージがやや異なり、ディ・ケアによって家族の役割の一部分を肩代りしている可能性が考えられた。さらに、因子得点に基づきコンセプトを3次元の意味空間に配置することにより、ディ・ケア、家族、お金などのコンセプトに関する差異が明らかとなり、両群間で意味構造の差異を認めた。今後通所者の社会復帰を推し進める為には、以上の点を認識したうえで、

ディ・ケア活動の工夫をしていく必要性を感じた。

参 考 文 献

- Brown, G.W., Birley, J.L.T. & Wing, J.K. 1972
Influence of family life on the course of schizophrenic disorders. : A replication. *British Journal of Psychiatry*, 121, 241-258.
- 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定 川島書店
- 丹羽真一 1984 分裂病患者の認知・行動障害と事象関連電位. 島蘭安雄, 稲永和豊(編) 分裂病とはなにか 東京大学出版会
- 大石勝代 1974 大学生, 中学生および精神分裂病者における意味構造の比較, *心理学研究*, 45, 21-32.
- 渡 正堯 1983 多変量解析プログラムライブラリ (その6) マイコンを利用したSD法調査 — 調査の実施 — インフォメーションサイエンス No.6, 113-124.
- 渡 正堯 1983 多変量解析プログラムライブラリ (その7) SD法調査 — データ集計とプロフィールの作成 — インフォメーションサイエンス No.7, 113-125.
- 渡 正堯 1983 多変量解析プログラムライブラリ (その8) SD法調査 — 対データの統計分析 — インフォメーションサイエンス No.8, 97-107.
- 渡 正堯 1983 多変量解析プログラムライブラリ (その9) SD法調査 — 因子分析プログラム — インフォメーションサイエンス No.9, 105-125.
- 渡 正堯 1984 多変量解析プログラムライブラリ (その12) SD法調査 — 3次元布置表示プログラム — インフォメーションサイエンス No.14, 75-85.